



令和7年産 気仙沼・南三陸 稲作情報 総括号

令和8年1月15日発行

宮城県米づくり推進気仙沼地方本部・宮城県気仙沼農業改良普及センター
TEL 0226-25-8069 FAX 0226-22-1606

1 気象経過

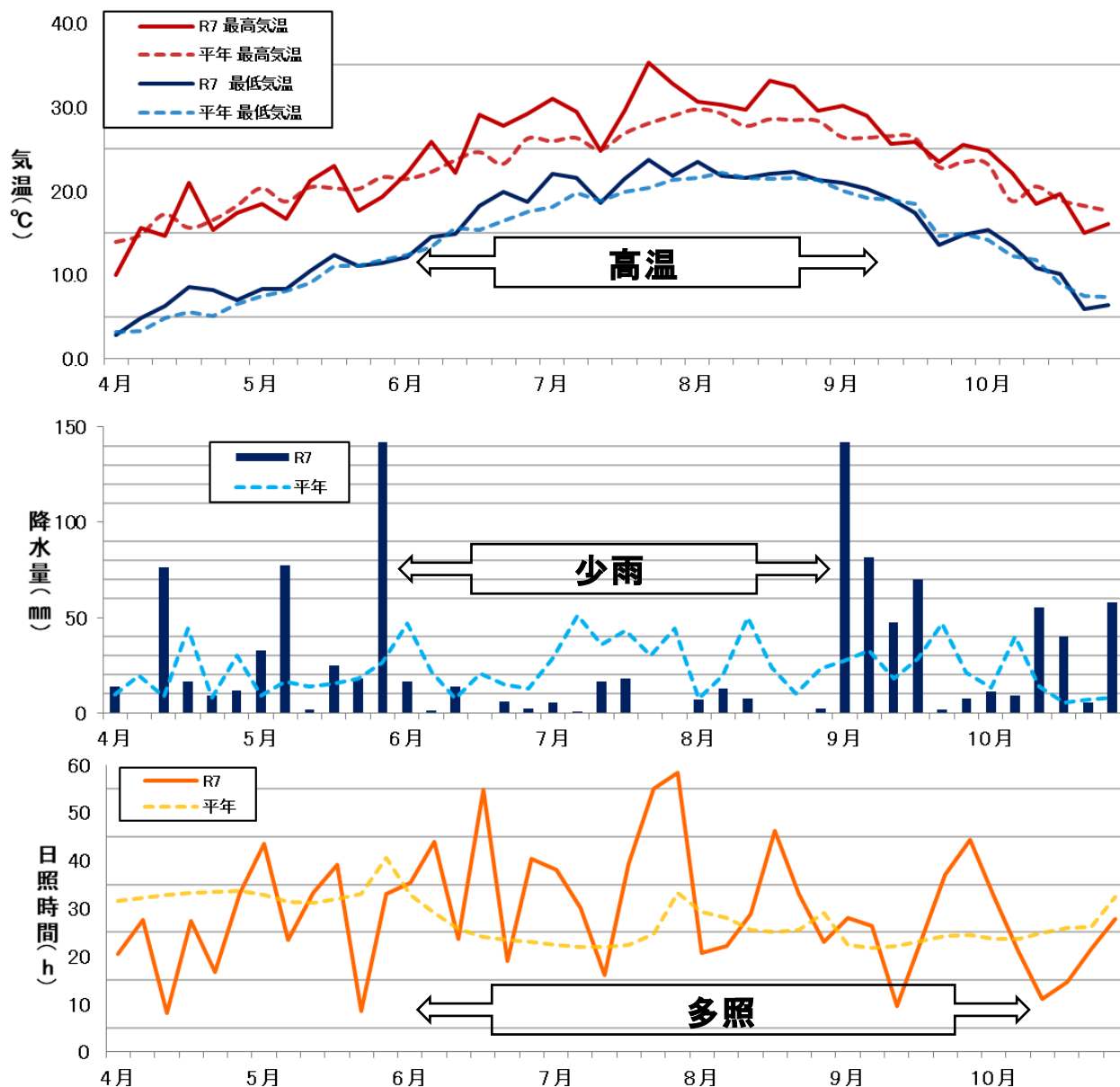


図1 令和7年稲作期間の気象経過図（気仙沼アメダス）

【気象の概況】

- 気温
水稲の生育期間を通しておおむね平年を上回る気温で推移しました。
- 降水量
6月から8月にかけて降水量が少ない期間が続きました。9月以降は平年を上回る降水量が記録されました。梅雨入りは6月23日頃で平年より11日遅く、梅雨明けは7月18日頃となり平年より6日早くなりました。
- 日照時間
4～5月にかけては曇りや雨の日が多く、日照時間は平年を下回りましたが、その後はおおむね平年を上回って推移しました。

2 管内の生育経過

表1 管内における各作業等の状況

年	播種			田植え			出穂			刈取		
	始期	盛期	終期	始期	盛期	終期	始期	盛期	穂揃期	始期	盛期	終期
R7	4/6	4/15	4/25	5/9	5/18	5/27	7/29	8/1	8/8	9/14	9/26	10/12
前年差	1日早	1日遅	3日遅	同	同	2日遅	1日遅	同	1日遅	2日早	2日早	1日早
平年差	2日遅	1日遅	同	1日遅	1日遅	1日遅	2日早	2日早	2日早	3日早	5日早	2日早

※「始期」、「盛期」、「終期（穂揃期）」は、それぞれ水稻作付け面積の5%、50%、95%で作業等が終了した日。

※「平年差」は、令和2年～6年の5か年平均値との差

(1) 播種

- ・管内の播種盛期は平年より1日遅い4月15日でした。
- ・育苗期は高温傾向で推移したため、一部で水分不足による苗の障害が散見されましたが、生育はおおむね順調でした。

(2) 田植え

- ・管内の田植盛期は平年より1日遅い5月18日でした。
- ・田植え以降は一時低温寡照となる期間もありましたが、おおむね順調に生育しました。

(3) 出穂

- ・6月から高温少雨傾向が続き、一部では出穂直前に田面が白くなるまで乾ききったほ場も散見されましたが、おおむね生育は順調で出穂盛期は平年より2日早い8月1日でした。

(4) 刈取

- ・登熟期間も高温で推移したことから、刈取盛期は平年より5日早い9月26日でした。
- ・週末にかけて雨の降る日が多かったことから、一部では刈り遅れや倒伏が見られました。

3 水稻生育調査ほの生育調査結果

(1) 生育状況

- ・苗の活着はおおむね順調で、6月以降は気温が高めに推移したことから生育は順調に進み、出穂期は7月30日、成熟期は9月4日でした。
- ・草丈はおおむね生育の目安どおりに推移しましたが、茎数は生育初期にかけて目安を大幅に上回り、葉色値は、幼穂形成期と減数分裂期の計2回追肥したものの、目安をやや下回りました。

表2 生育調査ほにおける生育ステージ

地点	年	品種	田植日	幼穂形成 始期	減数 分裂期	出穂期	成熟期
気仙沼市 本吉町	R7	ひとめぼれ	5/14	7/4	7/14	7/30	9/4
	R6	ひとめぼれ	5/20	7/10	7/18	8/2	9/9
【参考】5/10植 作況試験ほ（古試）	R7	ひとめぼれ	5/9	7/6	7/15	7/28	9/4

※今年度の生育調査ほ場は調査2年目のため平年値はありません。

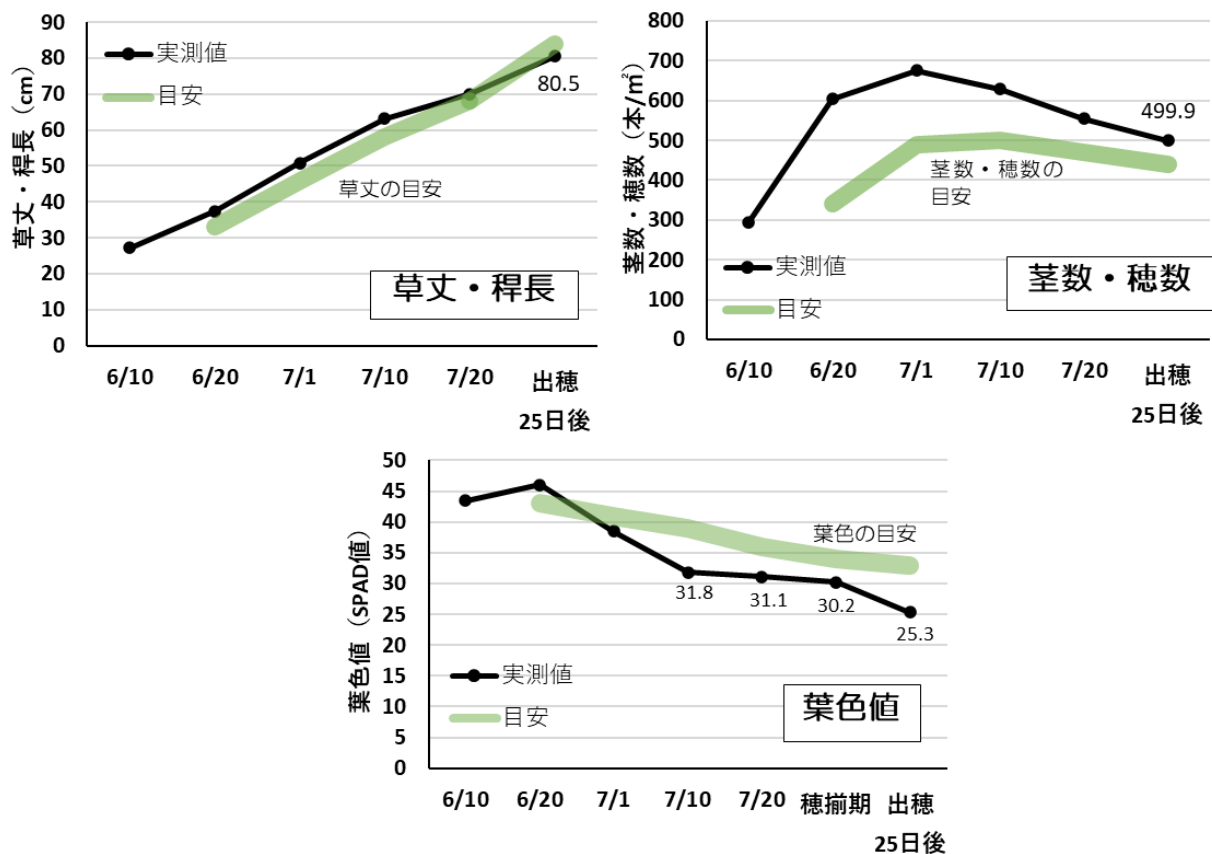


図2 生育調査ほにおける生育経過

(2) 収量・品質

- ・穂数は約 491 本/m²と目安の 410~460 本/m²の範囲を超えたことから、一穂粒数が 56.8 粒と少なくなり、m²当たり粒数は 279 百粒とやや少なくなりました。登熟初期の天候に恵まれ、登熟歩合は 91.4%、千粒重は 23.3g となり、精玄米重は 59.4kg/a となりました。

表3 生育調査ほにおける収量調査結果

地点	年	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	m ² 当たり 粒数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	精玄米重 (kg/a)
気仙沼市 本吉町	R7	491	56.8	279	91.4	23.3	59.4
気仙沼市 本吉町	R6	446	57.7	258	86.3	23.3	51.8
【参考】5/10植 作況試験ほ(古試)	R7	436	68.4	298	86.7	22.8	58.8

※「登熟歩合」以降は、1.90mmの篩い目による調査結果

表4 生育調査ほにおける品質調査結果

地点	年	整粒 (%)	胴割粒 (%)	白未熟粒 (%)	青未熟粒 (%)	その他 未熟粒 (%)	着色粒 (%)	被害粒 (%)	玄米タンパク質 (%)
気仙沼市 本吉町	R7	72.7	1.2	8.1	2.4	14.6	0.1	0	5.8
気仙沼市 本吉町	R6	68.2	1.3	7.9	0.7	20.7	0.03	0.1	6.3
【参考】5/10植 作況試験ほ(古試)	R7	69.4	0.2	4.8	5.7	19.4	0.1	0.5	6.1

※穀粒判別器 RGQ1100B(サタケ社)による

※「玄米タンパク質」は、インフラテック(フォス・ジャパン社)による分析値

4 金のいぶき展示ほの生育調査結果

(1) 生育状況

- 田植えは前年とほぼ同時期の5月30日となり、平年より9日遅くなりましたが、生育期間を通しておおむね高温で推移したことから生育は順調に進み、出穂期は平年より2日遅く、成熟期は平年より3日遅くなりました。
- 生育初期の茎数の増加は停滞しましたが、その後は高温により順調に増加し、出穂期の穂数は442本/㎡となり目安量を確保しました。
※目安の茎数 幼穂形成期：570～620本/㎡、減数分裂期：490～540本/㎡、出穂期 440～490本/㎡
- 目安の葉色値を維持するために追肥を行い、期間を通して目安を上回りました。
※目安の葉色値（SPAD値） 幼穂形成期：33～35、減数分裂期：30～32

表5 金のいぶき展示ほにおける生育ステージ

地点	年	田植日	幼穂形成 始期	減数 分裂期	出穂期	成熟期
気仙沼市 本吉町	R7	5/30	7/16	7/24	8/8	9/24
	前年差	1日遅	4日早	6日早	1日早	同
	平年差	9日遅	5日遅	同	2日遅	3日遅
【参考】5/10植 作況試験ほ（古試）	R7	5/9	7/7	7/15	7/28	9/9

※「平年差」は、令和4年～6年の3か年平均値との差

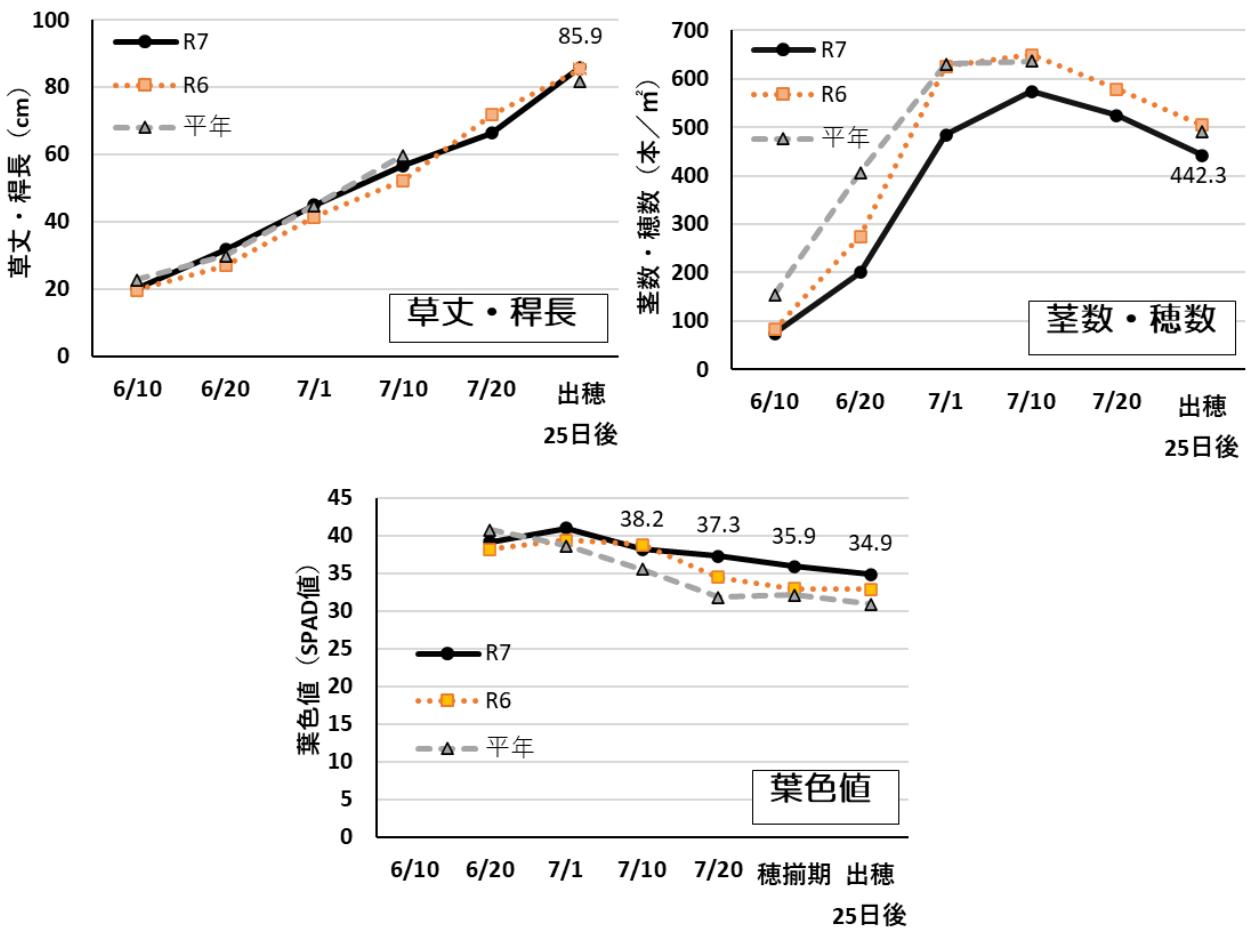


図3 金のいぶき展示ほにおける生育経過

(2) 収量・品質

- ・穂数は 504 本/㎡、1 穂粒数は 71.9 粒となり、肥培管理により㎡当たり粒数は 362 百粒と目安を上回りました。しかし登熟期に用水不足の影響を受け、登熟歩合は目標を下回りました。精玄米重は平年比 104%の 49.6kg/a でした。（「目安（目標）」の数値については表 6 を参照）
- ・今作は死米の発生割合が多くなりましたが、登熟期の高温や目安を超える粒数の着生が影響したと考えられます。

表 6 金のいぶき展示ほにおける収量調査結果

地点	年	穂数 (本/㎡)	1 穂粒数 (粒)	㎡当たり 粒数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	精玄米重 (kg/a)
気仙沼市 本吉町	R7	504	71.9	362	49.7	31.4	49.6
	前年比	101%	105%	106%	83%	146%	113%
	平年比	103%	110%	113%	76%	138%	104%
【参考】5/10植 作況試験ほ（古試）	R7	429	66.5	285	73.6	22.2	46.6
（参考）	目安（目標）	460～510	60～68	300～330	70～75	22.4～23.0	51～54

※「平年比」は、令和4年～6年の3か年平均値との比

表 7 金のいぶき展示ほにおける品質調査結果

地点	年	みなし 整粒 (%)	整粒 (%)	胴割粒 (%)	白未熟粒 (%)	青未熟粒 (%)	その他 未熟粒 (%)	着色粒 (%)	死米 (%)	被害粒 (%)	玄米タン パク質 (%)
気仙沼市 本吉町	R7	24.7	0.9	0.1	23.8	0	0	9.1	65.9	0.2	8.0
	R6	64.5	1.3	0.1	62.8	0.2	0.4	2.8	32.0	0.3	7.1
	平年	49.6	1.6	0.1	47.9	0.7	0.1	3.1	46.0	0.3	7.4
【参考】5/10植 作況試験ほ（古試）	R7	28.0	2.1	0.2	25.9	0.01	0.01	14.1	57.2	0.5	7.1

※穀粒判別器 RGQ100B（サタケ社）による

※「玄米タンパク質」は、インフラテック（フォス・ジャパン社）による分析値

※「平年」は、令和4～6年の3か年平均値

※「みなし整粒」は、「整粒」、「白未熟粒」、「その他未熟粒」の合計

5 水稻直播栽培展示ほの生育調査結果

(1) 生育状況

- ・出芽、苗立ちはおおむね良好で、出芽揃いは5月10日、苗立率は 67.7%でした。生育期間はおおむね天候に恵まれ、出穂期は 8 月 10 日、成熟期は 9 月 16 日でした。
- ・6 月 20 日から 7 月 1 日にかけて茎数の増加が著しく、昨年を大幅に上回る茎数となりましたが、6 月から高温多照傾向で推移したことや、昨年より窒素投入量を増やしたことが影響したと考えられます。

表 8 直播栽培展示ほにおける生育ステージ

地点	年	品種	播種日	出芽揃日	幼穂形成始期	減数分裂期	出穂期	成熟期
気仙沼市 本吉町	R7	ひとめぼれ	3/27	5/10	7/17	7/21	8/10	9/16
	R6	ひとめぼれ	3/25	5/10	7/13	7/23	8/8	9/20

※乾田直播栽培の調査は、令和5年度から開始したため平年値はありません。

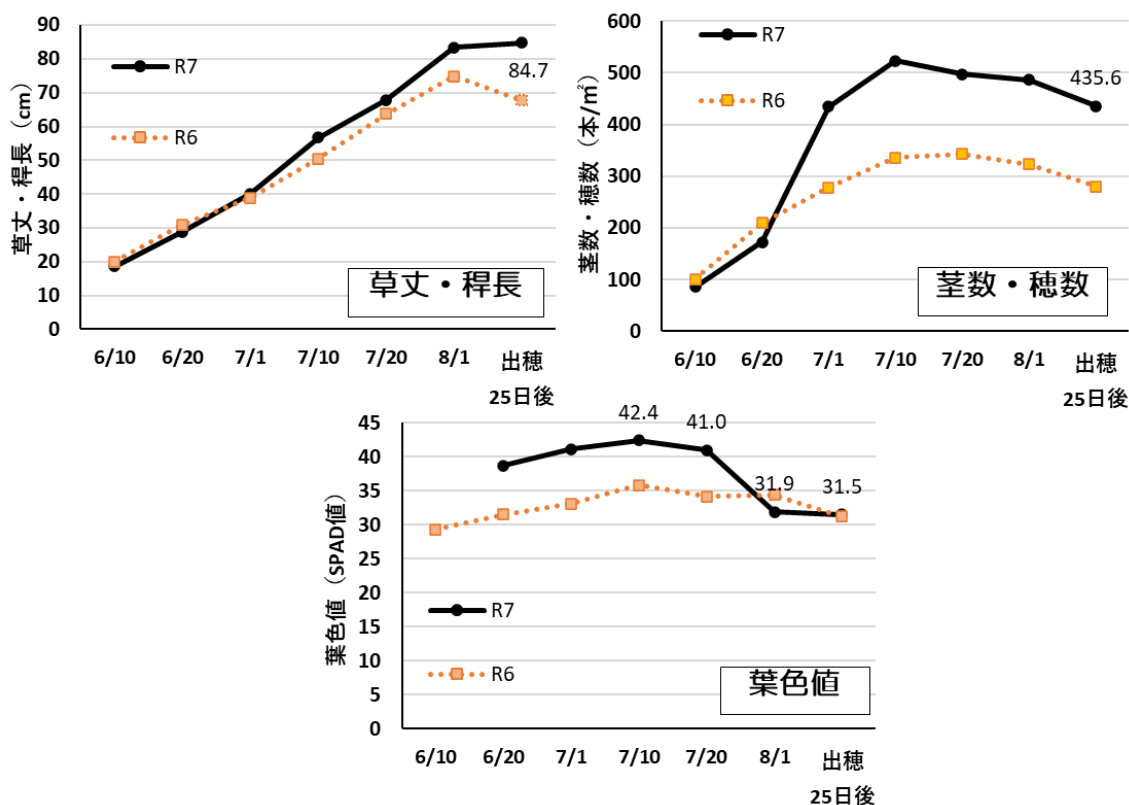


図4 直播栽培展示ほにおける生育経過

(2) 収量・品質

- ・穂数は生育量の目安の範囲となる 436 本/m²となりました。一穂粒数は 80.5 粒、m²当たり粒数は 351 百粒となり目安を上回りましたが、登熟歩合は 71.0%、精玄米重は 47.0kg/a と目標を下回りました。（「目安（目標）」の数値については表9を参照）
- ・登熟期間の高温及び用水不足の影響が大きく白未熟粒の発生は 5.3%でした。

表9 直播栽培展示ほにおける収量調査結果

地点	年	品種	穂数 (本/m ²)	1穂粒数 (粒)	m ² あたり 粒数 (百粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	精玄米重 (kg/a)
気仙沼市 本吉町	R7	ひとめぼれ	436	80.5	351	71.0	22.7	47.0
	R6	ひとめぼれ	280	66.8	187	79.1	22.5	33.3
(参考) ひとめぼれの目安(目標)			410~460	60~70	280~300	85~90	22.3	55.0

表10 直播栽培展示ほにおける品質調査結果

地点	年	品種	整粒 (%)	胴割粒 (%)	白未熟粒 (%)	青未熟粒 (%)	その他 未熟粒 (%)	着色粒 (%)	死米 (%)	被害粒 (%)	玄米タンパク質 (%)
気仙沼市 本吉町	R7	ひとめぼれ	73.0	0.1	5.3	0.1	14.9	0.1	0.2	0.4	7.6
	R6	ひとめぼれ	75.4	0.1	2.5	0.03	21.1	0.2	0	0.6	6.99

※穀粒判別器 RGQ100B（サタケ社）による

※「玄米タンパク質」は、インフラテック（フォス・ジャパン社）による分析値

6 作況と品質

(1) 作況（東北農政政局、令和7年12月12日公表）

令和7年産主食用米の収穫量は、生産者が使用しているふるい目幅ベースで34万2,800t（前年に比べ2万1,600tの増加）。

- 令和7年産水稻の生産者が使用しているふるい目幅ベース（ふるい目幅1.90mmベース）の収穫量（主食用）は34万2,800tで、前年産に比べ2万1,600t増加となりました。これは、10a当たり収量（生産者が使用しているふるい目幅ベース）は、田植後の低温により全もみ数が少なくなったことから、前年産に比べ25kg減少の525kgとなったものの、作付面積（主食用）が前年産に比べ6,900ha増加の6万5,300haとなったためです。

- 作況単収指数は99となりました。

※作況単収指数は、10a当たり収量の前年産までの5か年中3年平均（最高、最低除く）に対する10a当たり収量の比率である。また、平成7年産から令和元年産までの作況単収指数は1.70mmのふるい目幅で選別された玄米を基に算出し、令和2年産以降の作況単収指数は生産者が使用しているふるい目幅ベースで算出した数値である。

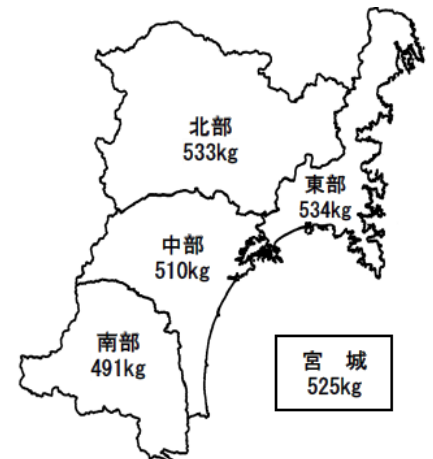


図5 作柄表示地帯別10a当たり収量（生産者が使用しているふるい目幅ベース）

(2) 1等米比率（東北農政政局、令和7年11月28日公表）

令和7年10月31日現在の本県の水稲うるち玄米の1等米比率は93.4%です。2等以下に格付けされた主な理由は、心白・腹白粒を含む形質（総検査数量に対する割合は3.25%）、斑点米カメムシ類による着色粒（同2.39%）、穂発芽や胴割れなどの被害粒（同0.55%）によるものです。

表11 宮城県の水稲うるち玄米における1等米比率（10月31日現在速報値）

1等米比率 (%)	R7年産	R6年産	R5年産	R4年産	R3年産
各年同期	93.4	89.8	82.9	96.2	93.9
各年最終※	-	89.8	83.9	94.2	92.5

※R6年産はR7年3月31日現在。R3～5年産は確定値。

- 白未熟粒（心白、腹白、背白、基部白等）

白未熟粒（心白、腹白、背白等）の発生は、出穂後20日間の平均で最高気温32℃、日平均気温が27～28℃、最低気温23～24℃を超過すると多発するとされており、特に、夜温が高いと稲の消耗が激しくなり発生が助長されるとされています。

本年の県生育調査ほ「ひとめぼれ」では、前年や平年と同様に、出穂後25日の葉色値や玄米粗タンパク含量と白未熟粒比には負の相関が認められ、出穂後25日の葉色値や玄米粗タンパク含量が大きいほど白未熟粒比が低下しました。

また、当地域生育調査ほでは県平均に比べ白未熟粒の割合が大きくなりましたが、出穂後25日の葉色値が目安を下回ったことが影響していると考えられます。

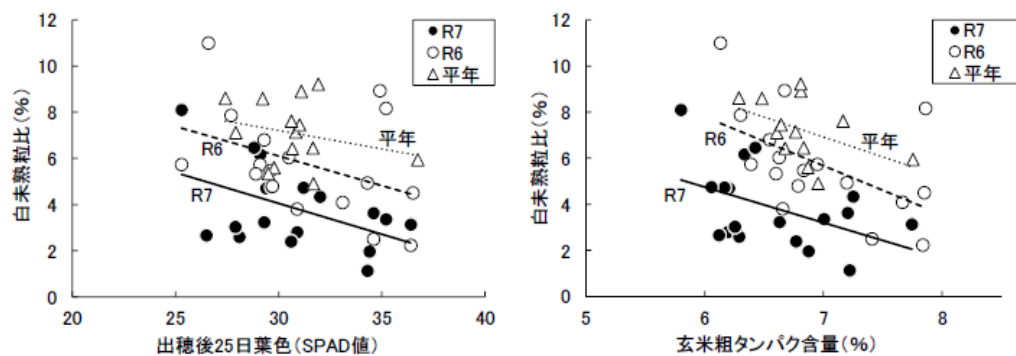


図6 生育調査ほ「ひとめぼれ」における出穂後 25 日の葉色値（左図）及び玄米粗タンパク含量（右図）と白未熟粒比の関係

注 1) 平年は、過去 5 年間の平均。

2) 生育調査ほの地点数は、R7 が 18、R6 が 17、平年が 14。

3) 白未熟粒比は、サタケ穀粒判別機 RGQ100B の測定値のうち、「乳白粒比」、「基部未熟粒比」及び「背腹白粒比」の合計値。

4) 玄米粗タンパク含量の測定は FOSS Infratec NOVA による（玄米水分 15%換算）。（宮城県古川農業試験場）

・斑点米カメムシ類による着色粒

本年度は高温で推移したことにより、斑点米カメムシ類の発生が早く、発生量も多くなりました。

本県における斑点米カメムシ類の重要種はアカスジカスミカメですが、本年は大型のカメムシ類であるクモヘリカメムシの発生が平年より多く確認されました。

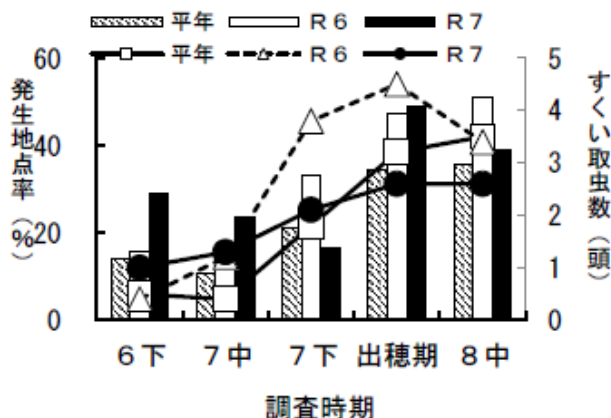


図7 アカスジカスミカメ成虫の発生点率及びすくい取り虫数の推移(本田)

※棒グラフ：発生地点率、折れ線グラフ：すくい取り虫数
(令和 7 年宮城県病害虫防除所)

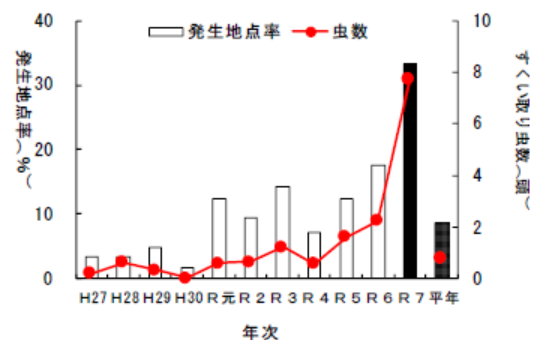


図8 クモヘリカメムシの発生地点率及びすくい取り虫数の推移(本田、8月下旬)
(令和 7 年宮城県病害虫防除所)

斑点米は、カメムシ類が水稻の籾に口針を突き刺し、吸汁加害することにより発生します。斑点米における黒変は、カメムシの吸汁加害で生じた傷口から細菌類が侵入して変色したものです。

宮城県で見られる斑点米には 3 つの型があります。本県で発生量の多いカスミカメムシ類は、籾のふ先を選択して穿孔するため、主に頂部加害型の斑点米を形成します。クモヘリカメムシ等の大型のカメムシ類は口器が強く子実粒のいたるところに被害が現れます。



図9 斑点米頂部加害型

左：頂部のみ 右：頂部＋くさび型



図10 斑点米側部加害型



図11 無差別加害型

7 県内における病害虫の発生概要（宮城県病害虫防除所）

（１）いもち病

葉いもち 発生量：平年並

- ・梅雨入りが6月23日頃で平年より11日遅く、梅雨入り後にも曇りや雨の日が多くなり、広域的な感染好適条件が出現しました。梅雨明けが7月18日頃と平年より6日ほど早く、その後高気圧に覆われ晴れる日が多かったことや、高温で推移したことから、病勢の進展は緩慢でした。

穂いもち 発生量：やや少ない

- ・穂いもちでは、出穂後は高気圧に覆われて晴れる日が多く、気温の高い日が続いたことから感染には不適であったため、一部のほ場で感染が見られましたが、その後病勢の進展は緩慢でした。



図 12 いもち病の病斑

（２）斑点米カメムシ類

斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ成虫） 発生量：多い

- ・6月から8月にかけて気温が平年より高く推移したことから、アカスジカスミカメの越冬世代成虫及び第1世代成虫の発生盛期が平年よりやや早まりました。
- ・また、本田内にアカスジカスミカメを誘引する雑草があり、カメムシ類の本田侵入を早め、本田での発生量が平年を上回りました。



斑点米 発生量：やや多い

- ・防除はおおむね適期に実施されましたが、防除回数が1回だった等、本年のカメムシ類の発生状況に対して、防除が適していなかった事例があり、また、斑点米カメムシ類の本田侵入時期が早かったことも斑点米の発生を助長しました。

クモヘリカメムシ

- ・本年は気仙沼管内において、大型カメムシであるクモヘリカメムシの発生が平年より多く確認されました。

図 13 アカスジカスミカメ 図 14 クモヘリカメムシ

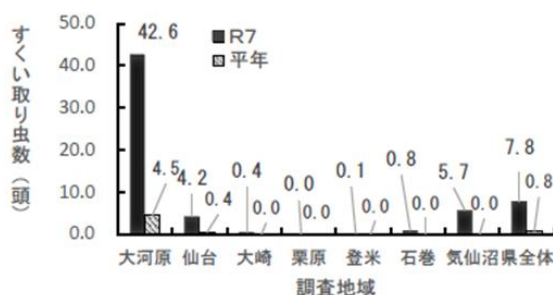


図 15 クモヘリカメムシの地域別すくい
取り虫数（8月下旬）
（令和7年宮城県病害虫防除所）

（３）紋枯病

発生量：多い

- ・昨年度の発生量が多かったことに加え、紋枯病は6月の気温が高いほど発病株率が高くなる特性があることから、今年度は発病が多くなったと考えられます。



図 16 紋枯病の発病株

8 令和8年産の作付けに向けて

品質向上と安定生産に向けて適切な栽培管理に努めましょう。

(1) 土づくり

近年は堆肥等の有機物施用が行われず、地力が低下しているほ場が多くなっています。地力の低下は、収量の減少、品質・食味の低下につながります。**深耕と有機物（完熟たい肥）の連用、土づくり資材（ケイ酸）の施用**により地力の向上を図り、品質の向上につなげましょう。

(2) 高温条件に対応した米づくり

地球温暖化に伴い高温傾向が続くことが見込まれます。高温時期の7月下旬から8月上旬での登熟を回避するため、可能な範囲で出穂期を遅らせる**晩期栽培**や**直播栽培**に取り組みましょう。また、出穂期以降の葉色を維持し登熟や充実度を高め、白未熟粒の発生を軽減させるため、**葉色に応じた追肥**を実施しましょう。

(3) 適正な基肥と追肥の実施

「ひとめぼれ」の適正籾数は、収量・品質の安定性から㎡当たり28千粒～30千粒です。適正籾数に対して過不足があるほ場では、下記の増加割合を参考に**窒素量を検討**しましょう。

- ・基肥 窒素 1kg/10a で籾数が約 1,500 粒/㎡増加
- ・幼穂形成期の追肥 窒素 1kg/10a で 1,500～2,000 粒/㎡増加

【参考】ひとめぼれの適正籾数及び品質を維持するための生育目標値

	田植え後～ 分けつ期	最高分け つ期前後	幼穂形成 期頃	減数分裂 期頃	穂揃期	出穂後 25日
草丈・稈長（cm）	32～34	45～48	56～59	66～69	—	82～85 （稈長）
茎数・穂数 （本/㎡）	310～ 360	460～ 520	470～ 530	450～ 500	—	410～460 （穂数）
葉色（GM 値）	41～44	40～42	38～40	35～37	33～35	33 以下

(4) 水管理

出穂後は水が必要な時期です。生育後半まで稲体の活力を維持するため、土壌を湿った状態に保つ**飽水管理**とし、**出穂後30日以降に落水**しましょう。

ほうすいかんり

飽水管理のメリット

◎限られた用水で実施可能

◎根の活力維持

◎地温の上昇抑制

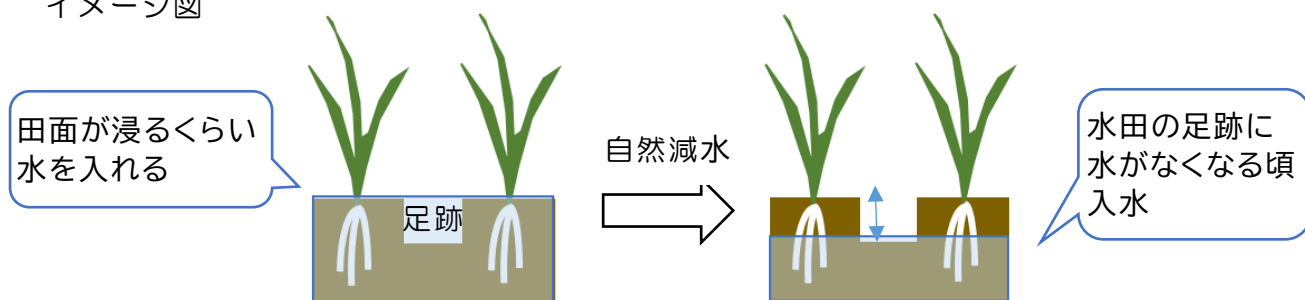
稲体の温度が夜間に下がるため、光合成により作られた養分が籾に転流しやすくなる。

白未熟粒や胴割粒の発生を抑制できる

【参考】飽水管理の方法

- ①水尻を閉める。畦畔からの漏水がないか確認する。
- ②田面が浸るくらい（ひたひた）に水を入れる。
- ③水を止めたら、水尻は閉めたまま、自然減水させる。
- ④水田の足跡に水がなくなる頃、又は番水のタイミングで次の水を入れる。（目安は3～5日おき）

イメージ図



(5) 病虫害防除の徹底

・いもち病

葉いもちの発生は、直接減収につながる穂いもちの伝染源となります。箱施用や水面施用剤による**予防防除を必ず実施**し、発生が認められた場合には直ちに補完防除を行いましょう。

・斑点米カメムシ類

水田畦畔の草刈りは出穂 15～10 日前に行うとともに、**薬剤防除は水稻の穂揃期とその7～10日後の2回を基本**としましょう。また、水田内のノビエ等の雑草は斑点米カメムシ類を水田内に誘引するので、雑草防除に努め増殖を防ぎましょう。

・紋枯病

病斑上に形成された菌核が翌年の伝染源となる病害です。発病が多かった場合は、箱施用剤や出穂前（7月下旬）の防除を検討しましょう。

(6) 雑草対策

残草（特にヒエ類）のあるほ場が散見されました。**発生草種に適した除草剤を選定**するとともに、**雑草の葉齢を確認**して葉期晩限を越える前に散布しましょう。また、水管理にも十分配慮し、安定した除草効果が得られるようにしましょう。

(7) 適期刈取

ひとめぼれの収穫期の目安は出穂後の積算平均気温 1,000℃となった頃です。

刈取適期を逃した米は、外観品質だけでなく食味も低下します。積算平均気温と合わせて、籾の熟色、籾水分等から総合的に判断し、適期刈取に努めましょう。

土壌分析をしましょう！

普及センターでは、土壌分析を随時受け付けています。
土壌分析を行うことで次作での適切な施肥が可能となります！

【土の採取方法】

- ① 均等になるように、ほ場 5 か所から深さ 15cm の作土層を採取します。採取した土は 1 つにまとめ、150g 程度（お茶碗 1 杯分）になるようにします。
- ② まとめた土を袋に入れて、気仙沼農業改良普及センターへ提出します。採取した場所がわかるように、袋には「ほ場番号」を忘れずに記載してください。

ほ場（上から見た図）

